2019年版のあとがき

映画「翔んで埼玉」では，今なお恐竜が棲み，命の保証のできない秘境と描かれた群馬だが，群馬県は1956年6月に当時の文部省により「音楽モデル県」に指定され，その後これに続くものは未だに存在しないので，全国随一の音楽県なのだ。

1945年11月，敗戦後の混乱期，この先どうやって食っていこうかと不安と焦燥に満ちた世相の中，音楽によって文化国家建設！をめざそうという人々によって高崎市民オーケストラが結成された。練習場を提供してくれた呉服屋の店主は，「もう二度と，昔のように品物を豊富に並べることなどできないから」と言って店の一棟を使わせてくれたという。翌年5月「群馬フィルハーモニーオーケストラ」と改称し，さらに1947年5月にはプロとして演奏を始める。しかし演奏会だけでは到底食べていけない。そこで編み出されたのが県内各地の学校を廻る移動音楽教室であった。

これが，東京フィルハーモニー交響楽団（1911年創立の，いとう呉服店（現在の松坂屋）少年音楽隊を源流とする）と放送協会の交響楽団（1925年に山田耕筰らが創立した日本交響楽協会と1926年近衛秀麿らが創立した新交響楽団を前身とする）に次いで，わが国で三番目に長い歴史を誇る（公財）群馬交響楽団の黎明である。移動音楽教室は今日まで72年間に亘って続き，特に近年は県内の全小学生は2回，全中学生は1回演奏を聴く機会を持つようシステム化され，これまでにのべ630万人以上が出席しているという。私も小学校のとき2回聴いた覚えがある。

群馬交響楽団の拠点となる演奏会場を作ろうという構想は1954年，折しもこの草創期の苦労を描いた映画「ここに泉あり」が撮影された頃に発案された。その実現に向け，群響の生みの親，育ての親でもあった丸山勝廣事務局長らが文部省に陳情に何度も出向いた結果実現したのが，冒頭の「音楽モデル県」である。最初は担当係もわからなかったところから，山田耕筰のアドバイスで社会教育局芸術課を訪ね，後に丸山さんの墓碑銘を揮毫するような関係にまでなった福原匡彦課長補佐との出会いがあった。数度の訪問の後，当時の内藤誉三郎局長（後に文部大臣）が言った言葉が良い。「役所には，いろいろな話が来るが，ほとんどこれからこういう仕事をやりたいというのが多い。しかし，あなた方は十年の実績を重ね，その結果を持ってきた。その実績を信頼して，認可しましょう」と。

この言葉は私がビッグバン宇宙国際研究センターに重力波データ解析部門を作る運動を始めた際の指針となった。まずは行動から，ということでスクールを開催して若手研究者の育成を始めたり，海外から錚錚たる泰斗を招いて国際会議を開き，サポートレターを書いて貰ったりした上で申請をはじめたのだ。それが実を結んで新部門が発足したのは，重力波初検出の報告がなされたわずか10日前のことだった。多くの人が注目する前から行動を始められたのは本当に良かったと思う。

さて，定期演奏会場たる大ホール，群馬音楽センターは，高崎市民の多額の募金のもと，1961年に竣工した。これは上野の東京文化会館ができたのと同じ年だが，全国の自治体が挙ってこうしたホールを作るようになったのは高度成長後の，それから十年以上も先のことである。これに対し丸山さんは，自分たちはまず中身を作ってから入れ物を作った，という誇りを持っていたという。聖書のマルタとマリアの逸話を彷彿させる話である。

苦しいときも高邁なビジョンを持って怯まず行動すること，何が一番大切なことかを見極めること，時代に先んじる勇気を持つこと。故郷の先達から励まされることは多い。しかもそれが，音楽という，目に見えないもの，あとに残せないものを通してであることに，私はいっそう惹かれる。そう，ここで説いた電磁気学も，この目で直接確かめたのは，砂場の砂鉄の実験だけなのだから。

2019年6月

横山順一